

## 書評 Xiaobo Lu, Cadres and Corruption: The Organizational Involution of the Chinese Communist Party

著者	菱田 雅晴
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジア経済
巻	43
号	9
ページ	68-73
発行年	2002-09
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00007866">http://hdl.handle.net/2344/00007866</a>

Xiaobo Lü,

*Cadres and Corruption :  
The Organizational Invo-  
lution of the Chinese Com-  
munist Party.*Stanford: Stanford University Press, 2000,  
xviii+368pp.ひし だ まき はる  
菱 田 雅 晴

## I

おそらくは最古の歴史を持つ政治社会現象にして、現存するほとんどの国の政治社会システムに汎通する病理現象として、腐敗は、法学者、犯罪学者、倫理学者、社会学者等の多くの社会学者、そして政策担当者、実務家の関心を集めてきた。アリストテレスあるいは孔子に遡るまでもなく、政治的腐敗現象と政治的発展、経済発展との関係や如何という分析的関心、そして腐敗なる病理を成功裏に押さえ込む方策とは何かといった実践的課題からの関心である。従来の理解からすれば、腐敗とは「法の支配」(rule of law)を阻害するものであり、社会的モラルを低下させ、結果、経済成長を阻害するものとされてきた。だが、翻って、この社会現象には、実は多くの解明されるべき課題が残されたままとなっている。

そもそも「腐敗」とはいかなる現象をさすのか。腐敗は時空を超えてあらゆる政治、社会システムに共通する概念と言えるのであろうか。その延長として言えば、腐敗が統治 (governance) の欠如、無効を意味するとすれば、その腐敗現象の存在の対極として、言わば「good governance」との距離を測定し得る共通のスケールはあり得るのであろうか。さらに、政治腐敗が発生するのはそもそもいかなる

要因ゆえなのか、相異なる政治システム下においてそれぞれ発生する腐敗現象に通底する要因はあり得るのか。タイプの異なるシステム下において、またそれぞれ異なる発展段階において、発生する政治腐敗現象にはいかなるパターンが存在するのか、なぜそうした相違が発生するのか。そもそもその相違とは何を意味するものであるのか。そして、腐敗現象があるシステムに存在することは、その経済社会的発展にいかなるインパクトを与えるのか、あるいは腐敗が経済発展を阻害し、社会的モラルの低下をもたらすという上述の伝統的理解はどこまで妥当であろうか。何らかの「積極的」側面はあり得ないのであろうか。そもそも腐敗はコントロール可能な社会現象なのであろうか、もしそうであるとするならばいかなる実践的方策が存在するのか、その有効な防止抑制策とは一体何であるのか。「腐敗の一般理論」は可能なのであろうか。

こうしたさまざまな問いは、言わば比較政治学の主たる関心項目にして公共政策の研究領域を構成することになるが、実際は政治学のみならず、経済学、社会学、法学、犯罪学、組織論、あるいは国際関係論、国際経営学等の社会科学分野全体の叡知を結集すべき恰好の研究テーマと言える。ましてや現代中国における政治腐敗現象の場合には、こうした問題設定に極めて刺激的な素材を提供している。何となれば現代中国は、社会主義計画経済体制からの移行期の真只中にあるのみならず、世界史的にも字義通り未曾有の急激な社会変動過程にあるからであり、中国の腐敗現象の討究とは、単なる地域研究としての中国研究の地平のみならず、あらゆる社会学者の知的営為に対し、誠に魅力的かつ挑戦的な研究テーマとなっている。

翻って、現代中国の腐敗をテーマとして掲げた本格的な研究作業は、少なくとも日本の学界におけるものとしては、寡聞にして知らない。その他のより刺激的なテーマの存在を示唆するものかも知れないが、まずは、われわれ自身のある種の怠慢とすべき部分もあろう。

## II

だが、この意味でもここに敢えて紹介しようとする本書は、現代中国の政治腐敗、官僚腐敗現象に正面から挑んだ第一級の作品である。著者呂曉波 (Xiaobo Lü) 氏は、現在コロンビア大学東アジア研究所長の職にあり、同大学バーナードカレッジおよび同大学院で比較政治学、アジア政治の教鞭をとる新進気鋭の政治学者である。著者は、昨年夏には独立行政法人経済産業研究所の上席客員研究員として半年余日本にも滞在、日本の通商政策の比較研究に従事していたこともある。厳密な論理構成を旨とする執筆スタイルから峻厳なるパーソナリティの持ち主かと思いきや、予想を裏切る闊達洒脱な温かい個性の人であった。

中国出身の著者は、1982年四川外国語学院卒業 (英語専攻) 後、北京の中国外交学院で修士号 (政治学、85年) を取得した後、アジア財団等の奨学金を獲て渡米、86年以来カリフォルニア大学バークレー校でR・スカラピーノ教授はじめジョーイット (Kenneth Jowitt) 教授らの指導の下、「政治腐敗とガバナンス」を中心テーマとした比較政治研究に従事し、94年にバークレー校から政治学博士の学位を授与されている。ある意味で、本書は上述各氏のほか、ディトマー (Lowell Dittmer)、ペリー (Elizabeth Perry)、ゴールド (Tom Gold) らのバークレーの研究環境の土壌の上に中国からの優れた知性が結実開花したものとも言える。著者は、優れた博士論文に贈られるガブリエル・アモンド賞にノミネートされた俊英として夙に知られ、すでにペリーとの共編著 [Lü and Perry 1997] および編著 [Lü 2000] を上梓しているほか、*China Quarterly*、*Comparative Politics* 誌等にも精力的に論考を発表している現在最も注目される気鋭の中国政治研究者の一人と言ってよい。

著者が腐敗問題に寄せる関心は、官僚制組織との関連であり、それが本書全体を貫く通奏低音ともなっている。本書は、中国における官僚腐敗現象を精査すること、そしてその現象の背後にある中国共産

党自身の組織としての発展を位置付けることの2つの位相から構成されているが、前者に関する著者の立場は極めて明快である。

通常の腐敗研究にあっては、冒頭瞥見したように、なぜ腐敗が起こるのか (why)、どのように腐敗行為は行われるのか (how)、その結果腐敗現象はどのようなインパクトをもたらすのか、そしていかに腐敗を根絶させるか (解決、治療) 等々が問われる中にあって、本書は前2者、すなわち why と how に限定した検討を行い、腐敗現象が単なる官僚、政治家個人の倫理感の欠如といった孤立した現象では決してなく、システムそれ自身の政治的發展という、言わばより大きな広表のコンテクストの裏に位置付ける。それゆえに、本書は中国の政治エリート集団としての中国共産党の組織体制、発展形態 (evolution) を主題に据えることとなり、革命 (revolution) 組織としての中国共産党がポスト革命期にあっていかなる“変容” (involution)<sup>(注)</sup>を遂げたのか、それらの“変容”は政治エリートとしての幹部の諸行動にいかなる影響をもたらしたのかが核心的テーマとなっている。

## III

本書の構成は以下のようになっている。

- 第1章 序論——組織、幹部、腐敗——
- 第2章 敵からの砂糖の弾丸——初期の腐敗——
- 第3章 大躍進——変容の始まり——
- 第4章 政治動員と幹部
- 第5章 ポスト毛沢東期の改革と幹部の変身
- 第6章 経済移行と幹部腐敗
- 第7章 結論

現代中国史の展開により、時系列的に1950年代初期の社会主義改造期、50年代後期の大躍進期、そして60年代の反修正主義期＝文化大革命期を取り上げ、それぞれ党の組織的統一性と幹部諸個人の行動に影響を与えたものとして、三反運動、反右派闘争、四清運動、そして文化大革命の4つのイベントを詳述し (第2～4章)、50年代後期からルーティン化と

官僚化の傾向を拒否したところに、支配政党としての中国共産党の組織変化の淵源を求めている。戦闘状態を擬したキャンペーン運動の展開、あるいは社会主義建設に向けた「核心任務」の提起等により、党官僚による逸脱行為が広範囲にわたっていったと指摘する。

一方、ポスト毛沢東期の腐敗現象が経済改革推進の帰結として、すなわち市場化措置の所産として、改革期固有の新たな現象として言及されること常ではあるが、改革期を俎上に載せた本書第5～6章にあっては、上述の観点から腐敗現象が歴史的・一貫性の下、連続スペクトラムとして把握されているのが特徴と言えよう。住宅の不正取得から官営公司による“官倒（投機行為）”等に至るさまざまな腐敗事象を検討した後、経済改革期の腐敗現象は質量ともに建国初期のパターンとは異なるにせよ、根源的発生因は不変と主張する。レジーム機構としての国家と国家エージェントとしての官界との関係が不分明である限り腐敗現象の一掃はあり得ないとして、改革が今日に至るも、組織変化によるネオ・トラディショナルリズムの位相を根本的に変容させるまでには至っていないとの判断がその根拠として示されている。最終章では、各論点を総括した上で、国家と国家エージェントとの関係を中心に旧社会主義国、第三世界諸国および革命前の旧中国との比較検討作業もなされている。組織レベルのテクノクラート化の進行および手続規則の合理化の浸透にもかかわらず、幹部層の行動様式はネオ・トラディショナルリズムの範疇にとどまり、幹部層の変貌のラグこそが移行期中国にとって最大の障害にして、中国が直面する最大の困難と論じている。

#### IV

本書の優れた点は、現代中国における腐敗現象を党組織と幹部の“変容”というパースペクティブの下に、一貫した歴史的記述により丹念に捉え返した傑出した労作との評価のみにとはとどまらない。腐敗現象、とりわけ政治腐敗が官僚制に対しいかなるインパクトを与えるのかが、腐敗の経済、社会への影

響関係とともに著者の本書執筆のそもそもの動機と思われるが、著者個人の主観的な経験としての中国国内における腐敗の実態を背景に、既述の通りパークレーでのソ連研究を専門とするジョーイット教授主宰のセミナー（社会主義国における腐敗現象）での経験が本研究のスタートとなっており、著者の10年余にわたる広さと深さを極めた研究蓄積の集大成と言ってよい。また、腐敗という現実政治世界にあって極めてセンシティブなテーマであるにもかかわらず、著者は1991～96年間に数次の中国調査を行い、現地での各種インタビュー、ヒアリング等のフィールド調査を敢行、中央高級幹部はもとより、農村では県級幹部、都市にあっては局級幹部への詳細インタビューを行っている。さらに一次資料の発掘という面では、地方誌および内部資料の活用が大陸出身の著者の面目躍如たるところとなっている。また、いわゆる「報告文学」、「紀実文学」、「伝記文学」が、その限界を抑えつつも本書の随所に補完利用されているところなど、他の類似研究作業の追従を許さない。

それらにもまして本書が卓越しているのは、その理論的な装備水準であり、本書全体を貫く「組織的変容」(organizational involution)という分析フレームワークの設定とその成功裏の援用である。著者の論理展開プロセスに沿って、この分析用具の意味するところを全体のコンテキストから少しばかり紹介することにしよう。

まずは、腐敗の定義を丹念に行っている。著者は腐敗現象への着目として、公益論 (public interest) から腐敗を定義するフリードリッヒ (Carl Friedrich) らの立場を、公益そのものが定義困難であることおよびその主観性、過度の規範性から排した上で、エコノミスト間に一般的な市場中心論 (market centered)、あるいはナイ (Joseph Nye) のパブリック・オフィス論を採用する。ナイの定義は、官僚腐敗の基礎的構成要素として公的場面における諸個人を据えるもので、私利追求のための意図的な逸脱行為をその行動特性として強調しているが、著者はこれに中国的特色として以下の修正を施している。すなわち、腐敗を贈収賄、公金

横領、投機行為のみに限定するのは狭過ぎる一方、グロスマン (Gregory Grossman) のセカンドエコノミー理論はあまりに広大で、焦点を失う。「官僚によるあらゆる腐朽した行為＝腐敗」とする最も広い定義は、経済犯罪、「腐化」(反モラル、スキャンダル相当行為)、「不正の風」、「党風問題」等と党の規律で律せられるすべてを腐敗とするものの、「脱離群集」、「文山会海」等のいわゆる官僚主義的作風はそこから除外されることになる。そこで著者は、ある一定の規律からの逸脱行為として、個人および集団がフォーマル組織を搾取するあらゆる官僚逸脱 (official deviance) 行為を腐敗として定義しようとする。こうすることで、公的エージェントによる私的利害追求以外の要素も含まれるし、統計の捏造、虚偽申告あるいは個人的ネットワークキング(「拉関係」)も腐敗行為として範疇に含まれる。官僚による腐敗行為がこの官僚逸脱であるが、逆に官僚逸脱のすべてが腐敗とは限らない。

こうした定義の上に、著者が次に行うのが腐敗の類型化作業である。経済的腐敗と非経済的腐敗との区分を押さえた上で著者は、汚職 (graft)、レント・シーキング (rent-seeking) そしてプレベンダリズム (prebendalism) の3者のサブ分類を行っている。最も一般的な賄賂、不正キックバック、横領、公金使い込み、不正使用等がこの「汚職」カテゴリーに入るが、ここでは官僚の不誠実ないし非合法の意図の所在がその特徴である。権限の独占との関係に基づくレント、すなわち制限的市場ゆえに発生する超過利得の取得は、中国にあって、官僚グループがそれを発生させる当事者であると同時にその飽くなき追求を行う者でもある点がその特性となる。従って、官僚自身あるいは官営公司による投機行為から、不正な徴税、分配割当て、科料、その他課金を通じた強要による不正利得行為に至るまで、このレント・シーキングタイプの腐敗は、稀少財、重要資源への独占的侵害がその特徴とされる。一方、これら2者が金銭的利害に直接かわる実体的なものであるのに対し、役職ポストゆえに生じる特権、特殊な役得を当該ポストに座する人間が手中にするのがプレベンダリズム (本義は「受禄聖職者」) であり、

官僚特権、裏口取引、クライエンティズム、クロニズム (依怙蟲員)、ネポティズム (親族重用) 等の非経済的腐敗行為もここに含められることになる。

第2に、著者は腐敗の発生「why」をめぐる分析枠組みの問題として、制度主義 (institutional) アプローチ、アクター中心合理主義 (actor-centered rationalism) アプローチ、社会文化 (socio-cultural) アプローチの3者を批判的に取り上げている。制度主義アプローチの基本前提は、政治システムおよび政治過程の中に腐敗発生因を見出すもので、先進国を対象にしたケーススタディにしばしば見られる官僚化 (bureaucratization) そのものの中に原因を探ろうとするものと、逆に非人格的な普遍的官僚システムの不在ゆえの「行政失陥」 (mal-administration) という2つの相異なる観点に分類している。一方、諸個人の理性的計算としての「取引コスト」に着目したミクロ経済学的な市場アプローチに基づくアクター中心合理主義は、腐敗取引行為のコスト／ベネフィット分析には極めて有力であるが、必ずしも純経済的動機に基づかない非取引型の言わば「自己腐敗」 (auto-corruption) に対しては、腐敗発生のより重要な社会政治的な環境を語ることができないと批判する。また、発展途上国を主対象にした価値、エートスあるいは「腐敗の文化」により着目する社会文化アプローチはポピュリスト理論ともされ、近代化論とも親和的で腐敗がある意味で機能的たることを強調する。とりわけ中国の伝統文化にあっては、規範の内面化に欠くところから、「腐敗の文化」が存在し、その改造に社会主義体制が不首尾に終わっていることがさらにこの傾向に拍車をかけたと指摘する。中国側論者もしばしば言及する「封建遺制」がこれに相当するが、その他の文化主義理論と同様に価値体系を独立変数として置き、これに余りに多くの説明を委ねる結果、この社会文化アプローチは静態的にとどまり、変動を語り得ないことを問題として指摘している。

かくして上述3アプローチを斥けた後に著者呂曉波氏が次に提起するのが、腐敗に対するポスト・ウェーバー的な組織論アプローチ (organizational approach) である。これは、すべてのフォーマル

な官僚組織に固有の問題として腐敗を把握し、非合理性、常に存在する予期せぬ結果、抑制されぬ行動等が官僚制の悪循環から発生するものとして、過度の合理化および制度化の所産として腐敗を捉える立場である。だが、これもフォーマル組織内におけるヒューマンファクターあるいはインフォーマル集団の重要性を指摘することには成功しても、その逆機能に関しては充分説得的とは限らないと批判的である。そこで、ポスト革命期の社会主義体制下の腐敗を捉える視点として、師にもあたるロシア／ソ連研究のジョーイットの組織論を援用する。ただ、著者の真骨頂は以下を修正するところに見出される。まず、組織そのものの腐敗 (*corruption of the organization*) と組織における腐敗 (*corruption in the organization*) の区分である。前者は各集団そのものの構成メンバーに対する規範賦与能力の低下であり、後者は集団構成メンバーそのものによる逸脱傾向の増加を意味しており、腐敗を組織レベルの問題として捉えるのかあるいは諸個人のレベルの問題として把握するかの相違を生むからである。さらに、両者のリンケージ、すなわち両者は相互にいかなる影響をもたらすのかを唱えるところに著者の主張がある。ジョーイットが政治文化と組織エトスを挙げるのに対し、著者が唱えるのは、党の規律、政策、行為準則等が幹部諸個人の行動様式にいかなる帰結をもたらしたのかということである。つまり支配政党としての中国共産党の組織的發展とそのエリート部分を構成する幹部の腐敗との関係如何を問おうとする「組織的変容」 (*organizational involution*) を提起している。この分析理論は、ウォルダールのネオ・トラディショナリズムに加えて、人類学分野の農業変容 (*agricultural involution*) 理論から示唆を受けたものであるが、革命党が多くの合理的、経験的あるいは非人格的な「現代的」構造を取り入れる中であって革命党としてのアイデンティティを喪失する中、各メンバーは革命イデオロギーでも現代的制度の実践でもなく、伝統的な行為範式の強化により自らを適合させる。その結果、正規化あるいは合理化への方向ではなく、むしろ体制は世襲化に向かわざるを得ないと定式化されている。

あるいは角度を替え、もう少し判り易く言うならば、ポスト革命期、すなわち革命に成功した後のレジームの「変容」とは、組織の細胞化、インフォーマルな組織作動様式、パーソナルなネットワーク、儀式的エトス、非経済型の腐敗等に彩られたネオ・トラディショナリズムとなるが、ここで著者が言う「組織的変容」とは、革命の統一性を維持した「進化」 (*evolutionary*) の発展とも異なり、逆に革命イデオロギーと究極目標を放棄し、官僚化を目指す「退化」 (*devolutionary*) とも方向性を異にする。すなわち「退化」による役割、規則に準拠した合理的な現代的官僚機構を生み出すわけでもなく、あるいは永続革命の理想型としての「進化」による規律と覚悟に富んだ革命幹部層を輩出することにも繋がらない。替わって、著者が提起する「組織的変容」がもたらしたものは、革命への情熱を失い、その地位に固執するのみの規律なき幹部層であり、それはプレ革命期、すなわち伝統的地方官僚の行動様式でもあった。この結果、「組織的変容」理論は、革命、すなわち伝統とのドラスティックな訣別による現代性の獲得と、その一方で現実の諸行為を支配するインフォーマルな伝統との間の矛盾をあらわにすることとなり、フォーマルな組織規範とインフォーマルなエリート行為様式との間の緊張関係に焦点が当てられる。インフォーマルな関係と行動様式が拡大される一方で、フォーマルな組織が進展することにより、この変化への対応として、その内部にインフォーマルなルールと関係性が強固に作り上げられていくと著者は立論している。

社会主義体制はインフォーマルな集団関係を絶とうとし、合理的な手続きシステムに高い価値をおくものの、皮肉ではあるがその結果はフォーマルな手続きが厳格に運用されるまでに至らない。すなわち、実質合理ではなく形式のみを強調する実質を持たない儀式と化す。こうした儀式化はフォーマル手続き部分の領域において発生するのみならず、実は革命のイデオロギーあるいは価値体系そのものにおいても発生すると著者は論断し、ディトマーに倣い“カリスマの儀式化”と名付けている。これらの分析の上に立ち、組織内部に組み込まれたエトスによっ

てその存続が支えられるべき十分に制度化された手続細則が欠如することが腐敗発生に繋がる、つまり断固とした規律ある幹部層を維持する能力の組織的喪失、意図されたフォーマルな組織目標と意図せざる組織メンバーのインフォーマル・レスポンスとの間のギャップこそが、現代中国における官僚逸脱現象を理解する鍵と主張している。この意味では、幹部腐敗もその他の官僚逸脱行為と同様にフォーマルな組織・規範へのインフォーマル・レスポンスである。従って、前述の3分類に戻るならば、中国共産党は一貫して官僚逸脱に直面しており、当初期は市場の存在そのものが欠如していたがために、幹部腐敗はプレベンダリズムの形態をまとい、後に計画経済要素の低下と市場の「降臨」により、中国の幹部腐敗はレント・シーキングの様相となったと分析している。かくして、現代中国における腐敗は経済改革のスタートにより始まったものでもなく、それゆえにこそ、たとえ改革が制度的ないし文化的レベルの全き変化をもたらしたにせよ、幹部腐敗が中国から消滅するものではあり得ないとの論点が各章を通じて確認されている。

与えられた紙幅はすでに大幅に超過しており、これ以上は語れないにせよ、ただ一点惜しむらくは、本書において腐敗抑制のための戦略方針および行為指針 (code of conduct) が必ずしも実践的な政策提言の形式で明示的に示されているわけではない点である。頭記の通り、分析的営為とともに実践的政策課題が腐敗へのそもそもの関心の根柢にあることを思えば、画竜点睛を欠くとも言うべきかも知れない。だが、それは言わばないものねだりの不遜な要求かも知れず、少なくとも本書の極めて示唆と啓発に富んだ内容とその分析水準を貶めるものでは決してない。S・ハンティントン、J・スコット、ローズ・アッカーマン (Susan Rose-Ackerman)、ヌーナン (John Noonan)、ハイデンハイマー (Arnold Heidenheimer)、エリオット (Kimberly Ann Elliot) らの腐敗研究の膨大な業績リスト群に新たに付加されるべき逸書であろう。

(注) 後述の通り、この“Involution”なる表現に

は綿密な概念規定が背後にあり、熟した定訳はない。中国では“内巻化”とも翻訳されているが、ここでは一応“変容”とあてておく。

### 文献リスト

- Clarke, Michael ed. 1983. *Corruption: Causes, Consequences and Control*. London: Frances Pinter.
- Elliot, Kimberly Ann ed. 1997. *Corruption and the Global Economy*. Washington, D.C.: Institute of International Economy.
- Heidenheimer, Arnold, Michael Johnston and Victor LeVine eds. 1989. *Political Corruption: A Handbook*. New Brunswick, N.J.: Transaction Publishers.
- Huntington, Samuel 1968. *Political Order in Changing Societies*. New Haven and London: Yale University Press.
- Klitgaard, Robert 1988. *Controlling Corruption*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Lü, Xiaobo and Elizabeth J. Perry eds. 1997. *Danwei: The Changing Chinese Workplace in Historical and Comparative Perspective*. Armonk, N.Y.: M.E. Sharpe.
- Lü, Xiaobo ed. 2000. *Promise and Problems of Old and New Democracies*. New York: The Academy of Political Science.
- Noonan, John 1984. *Bribes*. New York: Macmillan.
- Rose-Ackerman, Susan 1978. *Corruption: A Study in Political Economy*. New York: Academic Press.
- 1999. *Corruption and Government: Causes, Consequences and Reform*. New York: Cambridge University Press.
- Scott, James 1972. *Comparative Political Corruption*. Englewood Cliff, N.J.: Prentice-Hall.
- Theobald, Robin 1990. *Corruption, Development and Underdevelopment*. London: Macmillan.

(静岡県立大学大学院国際関係学研究科長)